

Schloss Schönbrunn

IMPERIAL LIVING

ベルエタージュの豪華な部屋

17世紀にはすでに、この土地にはハプスブルク家の離宮がありましたが、1683年のオスマントルコ軍による第二次ウィーン攻撃の際に破壊されました。オスマン帝国に勝利した後、皇帝レオポルト1世は、オーストリアのバロック建築家、ヨハン・ベルンハルト・フィッシャー・フォン・エルラツハに狩猟用の宮殿建設を依頼しました。その半世紀後に、マリア・テレジア女帝が宮廷建築家ニコラウス・パカッシに命じ、その狩猟用宮殿をロココ様式に改築・増築させ、夏の離宮としました。女帝は1500人以上もの宮廷人とともに、夏の数か月をこの宮殿で過ごしたのです。宮殿の内装や調度品の選定には皇帝一家の人々が自ら関与しています。宮殿を見学すれば、ハプスブルク家の生活様式や日常生活、そしてその歴史を感じていただけることでしょう。

マリア・テレジアの後継者たちもこの宮殿に手を加えました。とりわけ数世代後の子孫にあたる皇帝フランツ・ヨーゼフはここで生まれ、68年に及ぶ治世の後、1916年にここで亡くなりました。階段を上り2階に到着したら、右手の「杉綾模様の間」にお進みください。

左手の窓から見える大きな中庭は子どもミュージアムの一部です。子どもミュージアムでは皇帝一家の日常生活について学び、またいろいろ試してみることもできます。

開いた扉からは、侍従武官の間を見ることができます。侍従武官の職務は軍事に関する最新情報を皇帝に伝えることでした。このため、侍従武官用の部屋が皇帝の居住部分に隣接していたものと考えられます。

第1室	警護の間
	
皇帝フランツ・ヨーゼフの護衛兵はこの部屋に配置され、皇帝の居室への出入口を警備していました。	
右手には陶器製のストーブがあります。宮殿内のストーブはすべて、皇帝一家の生活を妨げないように、また貴賓室が汚れないように、各室背後の通路から薪を入れて加熱していました。19世紀には熱風暖房となりましたが、この暖房装置も1992年からは使用されていません。	

第2室	ビリヤードの間
	
この部屋は皇帝フランツ・ヨーゼフへの謁見を待つ人々の控室でした。謁見は週二回行われました。ビリヤード台はフランツ・ヨーゼフの祖父にあたる皇帝フランツ2世/1世のもので、軍人の娯楽用に使われていました。	
壁には大きな絵画が3枚飾られています。中央の絵画には1758年のマリア・テレジア勲章の第1回叙勲式の様子が描かれています。マリア・テレジアが創設したこの勲章は王朝初の功労勲章で、皇室が与えた最高位の勲章のひとつです。左右の絵画は勲章創設100周年記念式典の模様で、フランツ・ヨーゼフは大ギヤラリーで豪華な晩餐会を、そして宮殿庭園でレセプションを開催しました。	

第3室	胡桃(クルミ)の間
	
この部屋の名の由来は高価なクルミ材の壁板です。金箔が施された装飾の壁板もロココ様式の豪華なコンソールテーブルもマリア・テレジア時代のオリジナルです。シャンデリアは19世紀に作られたものです。	
フランツ・ヨーゼフの時代、ここは謁見の間でした。人々は受賞に対する感謝、嘆願、あるいは公職に就いた場合の挨拶に皇帝を訪問したのです。フランツ・ヨーゼフは午前中だけで100人もの人々と会うときもありました。皇帝の優れた記憶力は有名で、一度会った人の名前や顔を忘れることはありませんでした。謁見は通常数分間で、皇帝が軽くうなずくのが終了の合図でした。	

第4室	フランツ・ヨーゼフの執務室
	
フランツ・ヨーゼフはわずか18歳でオーストリア皇帝に即位しました。毎日膨大な量の仕事をこなし、毎日朝5時前には仕事机に向かい、そこで一日を過ごしました。右側にあるのがその机です。皇帝はここで書類に目を通し、朝食や昼食も運ばせました。この机で皇帝は国家元首としての実務を行ったのです。	
皇帝は私室に豪華な内装を望みませんでした。プライベートな絵画や家族の写真、子供や孫たちからの贈り物を飾っただけでした。2枚ある大きな肖像画のうち1枚は33歳のフランツ・ヨーゼフを描いたものです。もう1枚は妻のエリザベート皇后で、シィイの愛称で知られる皇后は伝説的な存在となっています。	

第5室	フランツ・ヨーゼフの寝室
	
皇帝の日課は寝室から始まりました。厳格な時間割に従い、朝4時には起床し、冷水で洗面した後、敬虔なカトリック教徒として、ベッド左側の祈祷台にひざまずいて朝の祈りを捧げました。鉄製のベッドは、このオーストリア皇帝の質素かつ簡素な生活を示すものです。	

このベッドで、フランツ・ヨーゼフは68年の治世を終え、第一次世界大戦の混乱が続く1916年、86歳で息を引き取りました。イーゼルに飾られた絵は、死の床にある皇帝です。皇帝はその長い生涯で数々の試練に見舞われました。最初の娘ゾフィーを2歳で亡くし、メキシコ皇帝となった弟のマクシミリアンは革命派に処刑されました。さらに、一人息子ルドルフの悲劇的な自殺、イタリア人の無政府主義者による妻エリザベートの暗殺もありました。この部屋の出口の扉の先、左側に皇帝専用のトイレがあります。1899年にフランツ・ヨーゼフのために「英国方式」で設置されたものです。

これから続く3つの小さな部屋はエリザベート皇后の居室でした。階段の小部屋は皇后の書斎です。皇后はここで数多くの手紙や日記、詩を書きました。この部屋はらせん階段で地上階にある皇后の私室とつながっていましたが、王朝終焉後に階段は撤去されました。化粧室は美容のための部屋でした。エリザベートは当時、最も美しい女性のひとりとされ、それを自覚していました。自らの美貌とスリムな体型を保つための美容や運動は日常生活の中心であり、床まで届くほど長い美しい髪の手入れには毎日数時間を要していました。

それでは、これらの部屋を通して、第9室へと進んでください。皇帝フランツ・ヨーゼフとエリザベート皇后の共同の寝室です。

第9室	共同の寝室
	
1854年にフランツ・ヨーゼフが従妹のエリザベートと結婚したとき、彼女はまだ16歳でした。この部屋は、二人の婚礼に際し、共同の寝室として用意された部屋です。フランツ・ヨーゼフは生涯、妻を敬愛していました。しかし、皇后も皇帝と同じだけの愛情を抱いていたかどうかは、今となっては知る由もありません。エリザベートは結婚当初から堅苦しい宮廷生活を拒否し、歳月とともに自信に満ちた女性へと成長しました。長期旅行を楽しむなど、自由な生活を送り、ウィーンにはほとんど姿を見せなくなりました。	
そして1898年9月、エリザベートが61歳のとき、ジュネーブ滞在中にイタリア人の無政府主義者、ルイジ・ルケーニによって鋭利なやすりで刺殺されました。	

第10室	皇后のサロン
	
この部屋はエリザベートの応接室です。白とゴールドの壁板と明るい色のシルク製の壁紙、そしてネオ・ロココ様式の豪華な家具によって、その独特の雰囲気作り出されています。	

第11室	マリー・アントワネットの部屋
	
この部屋は皇帝一家のダイニングルームとして使われていました。家族の夕食会は厳格な宮廷儀式に従って行われました。ダイニングテーブルの中央に花や果物、お菓子を盛り付けた金メッキのテーブル装飾を置き、毎回豪華に飾りました。公式晩餐会ではフランス料理が提供されましたが、家族の夕食会ではフランツ・ヨーゼフはウィーナー・シュニッツェルやグーラッシュ、ターフェルシュピッツ、そして有名なカイザーシュマーレンといったウィーン料理を好みました。常に出来立ての料理を温かいまま提供できるように、宮殿の厨房棟から各部屋まで料理を保温箱に入れて運び、隣接する部屋で炭火コンロ、後年はガスコンロを使って温めました。皇帝はテーブルの中央の席に、皇后は出席しているときはその向かい側に座りました。エリザベートはスリムな体型を維持しようと断食療法を行うことが多く、食事会にはほとんど参加しませんでした。家族の夕食会は通常夕方6時に始まり、3品から6品のコース料理でした。	

第12室	子供たちの部屋
	
子供たちの部屋にはマリア・テレジアの娘たちの肖像画が飾られています。女帝は11人の娘の多くを、若い年齢で政略結婚させました。扉の左側にある絵は、マリア・テレジアが寵愛した娘、マリー・クリスティーネの肖像画です。彼女だけは自ら望む相手との恋愛を許され、ザクセン・テシェン家のアルベルト公と結婚しました。アルベルト公はアルベルティーナ美術館の創設者です。ここからはバスルームを見ることができます。1917年にハプスブルク王朝最後の皇后ツィタのために設置されました。	

出口から次の部屋に進む前に、朝食用の小部屋もご覧ください。壁を装飾している楕円フレーム内のアププリケは、マリア・テレジアの母、エリザベート・クリスティーネの手製です。

第14室	黄色いサロン
	
この黄色いサロンから、宮殿の庭園側の部屋が続きます。ここではジュネーブの画家リオータル作のパステル画にご注目ください。市民階級の子供たちの姿が極めて写実的に描かれています。隣の部屋にあるような、マリア・テレジアの子供たちを描いた典型的な宮廷風肖像画とは対照的な作品です。宮廷画家マルティン・ファン・マイテンス作のハンガリー女王としてのマリア・テレジアの肖像画もあります。	

第16室	鏡の間
	
鏡の間は、マリア・テレジアが小規模なコンサートなど家族向けの祝宴に使用しました。1762年、6歳のモーツァルトが初めて女帝の前で演奏したのはこの部屋でした。モーツァルトの父親はこの演奏後、誇らしげにこう書き記しています。「ウォルフエルは陛下の膝に上がり、首に手を回して上品にキスをした」	
第17,18,19室	ローザの間

この部屋とその先の2つの部屋は「ローザの間」と呼ばれています。風景画家ヨーゼフ・ローザにちなんで名づけられました。この部屋に入る扉の左側にある絵画には、スイスのアールガウ地方にあるハビヒツブルク城が描かれています。この城はハプスブルク家発祥の地です。	
また、皇帝フランツ1世シュテファン の肖像画もあります。彼は妻マリア・テレジアの巧みな外交手腕により、1745年にフランクフルトにて神聖ローマ帝国皇帝に選出され、即位しました。マリア・テレジアはハプスブルク家の領地を統治し、フランツ・シュテファンは皇帝としての執務のほか、特に自然科学と財政に力を注ぎました。この肖像画にはさまざまな物や収集品も描かれており、それらを見れば皇帝がどのような芸術、歴史、自然科学に興味を持っていたのかがわかります。	

第21,22室	大小のギャラリー
	
宮殿中心部にある大ギャラリーは皇室のレセプション、舞踏会、晩餐会などに使われました。長さ40メートル以上、幅10メートル近い大きさの大ギャラリーは宮廷の行事に理想的な空間でした。クリスタルガラスの鏡、金箔を施した漆喰装飾、そして天井のフレスコ画など、大ギャラリー全体がロココ時代の芸術作品です。フレスコ画はイタリア人画家グレゴリオ・グリエルミが制作したもので、マリア・テレジアの治世を賛美しています。フレスコ画の中央にあるのは即位するフランツ・シュテファンとマリア・テレジアです。また、その周囲には統治者が持つべき徳目や美德を表現した人物や、各地にある王家の領地を象徴するものが描かれています。大ギャラリーには大きなシャンデリアが2つあります。1901年に宮殿が電化されるまで、金箔が施された木製シャンデリアにはそれぞれ70本のキャンドルが灯されていました。	

王朝終焉後、大ギャラリーはコンサート会場に使われています。1961年にはここで、アメリカのジョン・F・ケネディ大統領とソ連のニキータ・フルシチョフ首相の歴史的な会談が行われました。

第23,24室	円形と楕円形の中国の小部屋
	
小ギャラリーの両側には珍しいタイプの部屋が2つあります。左側は楕円形、右側は円形の小部屋です。マリア・テレジアは当時流行していた中国や日本の美術品を愛好していました。これら2つの小部屋の特徴は、木製の白い壁板にはめ込まれた中国製の漆塗りの板と、金箔の施された枠に一体化した小さな飾り棚です。棚には青花磁器などが置かれています。	
また、芸術的な技法で仕上げられた寄木細工の床も見事です。これらの小部屋は娯楽用の部屋や会議室として使われていました。円形の中国の小部屋では、マリア・テレジアと国家宰相カウニッツ侯爵が機密会議や密談を行っていました。	

隣接の小ギャラリーは宮殿の庭園に面しています。小ギャラリーは家族の聖名祝日や誕生日のお祝いに使用されました。外には宮殿庭園とマリア・テレジアの時代に整備されたグロリエッテの素晴らしい景色が広がっています。前回の修復の際に、19世紀当時の光沢仕上げの白い壁面が再現されました。

第23,24室	円形と楕円形の中国の小部屋
	
小ギャラリーの両側には珍しいタイプの部屋が2つあります。左側は楕円形、右側は円形の小部屋です。マリア・テレジアは当時流行していた中国や日本の美術品を愛好していました。これら2つの小部屋の特徴は、木製の白い壁板にはめ込まれた中国製の漆塗りの板と、金箔の施された枠に一体化した小さな飾り棚です。棚には青花磁器などが置かれています。	
また、芸術的な技法で仕上げられた寄木細工の床も見事です。これらの小部屋は娯楽用の部屋や会議室として使われていました。円形の中国の小部屋では、マリア・テレジアと国家宰相カウニッツ侯爵が機密会議や密談を行っていました。	

